

ポートランド美術館インターン報告書

岡野 素子

本稿は平成十四年七月八日から同年八月六日まで報告者が参加したアメリカ合衆国オレゴン州ポートランド美術館 The Portland Art Museum のインターンシップについて報告するものである(一)。

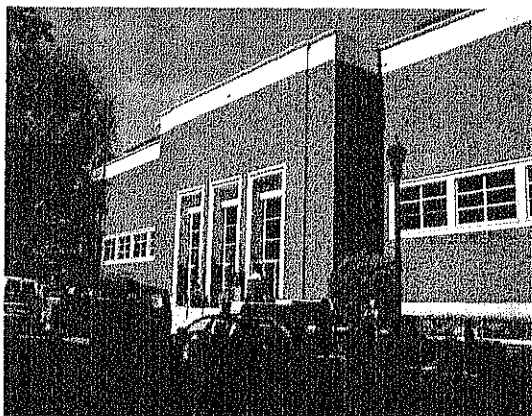
期間中、報告者は「日本帝国の輝き―ハリリ日本明治期美術コレクション―展」The Splendors of Imperial Japan: Arts of the Meiji Period from Khalili Collection において展示解説や関連行事の補助、また版画部門での調査などを行い、美術館の運営についていくつかわかることができた。本論では、期間中に報告者が現地で見聞した米国の美術館の運営と展示の状況について、日米の差異を踏まえた上で、同展に見るポートランド美術館の地域戦略を報告する。

一、ポートランド美術館概要

ポートランド美術館は一八九二年、七名の資産家、ホルベット Henry W. Corbett, 1827-1903、ウィルソン Dr. Holt C. Wilson、フレイリング Henry Failing, 1834-1898、リンズ William M. Ladd, 1826-1893、ヒンジャー Winslow B. Ayer, 1860-1935、ハリオット Rev. Thomas L. Eliot、ランド C.E.S. Wood が、美術によって市民を教育するという目的を掲げてポートランド美術協会 Portland Art Association を設立したことに始まる(二)。創設時はギリシャ・ロ

メアリー・アンドリュース・ラッド・コレクション Mary Andrews Ladd Collection と呼ばれる日本の版画約七五〇点が含まれ、報告者は今回それらを保管・調査するギルキー・センター Gilkey Center で調査協力を行った。十九世紀末から二〇世紀初頭にかけてラッド夫妻が収集した浮世絵の数々は、アメリカが所有する浮世絵コレクションの中でも最も早い時期のものである。

美術館は現在、美術大学とフィルムセンターと並ぶ文化拠点となってお



ポートランド美術館正面入口



中庭にはオープンカフェがある

り、裁判所や市庁舎、劇場、大学などが立ち並ぶポートランド市の中心街に立地している(3)。

六〇〇名超のボランティアが働き三万点以上の作品を統括する館のキュレーターは僅か六名である。それぞれ学問的専門分野を持つキュレーターは、全体の運営や関連行事の手配等の業務には従事せず、研究者、教育担当者、図書館司書、事務担当者はそれぞれ別に雇用されている。分野を限定して資金が提供される場合があるため、キュレーターが資金集めの交渉に参加することはあるが、管理部門スタッフやボランティアがキュレーターに会う機会は殆ど無い。

収蔵庫は、前述のカテゴリーごとに独立した各研究室に併設して設けられ、研究者もしくは管理者が常駐している。報告者が入室を許された版画部門の収蔵庫には、浮世絵を含む約二万二千枚の版画・デッサンが収蔵され、浮世絵のラッド・コレクションは、寄贈されたときに収集家が区分した状態で作者のアルファベット順に配列されていた。菱川師宣、鈴木春信を始め、写楽、豊国、歌麿、春章、広重、北斎、国貞、国芳、芳年その他、浮世絵史上に名を残した絵師の作品が体系的に揃えられ、現代では恩地孝四郎や村井正誠の版画まである。戦前当時、日本文化の情報が少ない状況でこれだけ質の高い浮世絵収集を行い、その後寄附を募る基盤を築いたラッド氏の慧眼に感嘆した。

ポートランド美術館は一九九七年から千年祭計画 Project for Millennium とし

て大規模な改築を進行中であり、報告者が九七年に訪れた当時から較べると、内装が美化され、中庭も増設されていた。美術館は中庭を隔てた向かい側に、図書館や二つのダンスホール、作品の貸し出しサービス店 Rental Sales Gallery を備えた北棟 North Wing を併設しており、今後古くなった北棟の改築に取り掛かる予定だという(4)。北棟では主に関連行事を行う他、市民のパーティー会場としても使用されている。

二. インターン中の記録

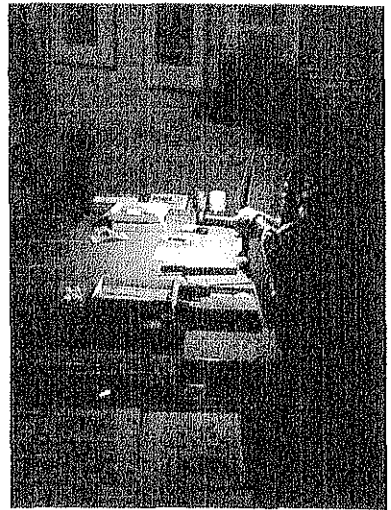
風作りワークショップ

インタールン初日から一週間は、Kite Making Program という、風作りのイベントが行われた。「日本風の会」から風職人、土岐幹男氏、吉積信彦氏及び会長茂田木雅章氏が来て、約一週間、ポートランド各地の風作りイベントでデモンストレーションを行った。会場は、ポートランド美術館内ブランドレー・ギャラリー Brantley Gallery、ダンスホール The Grand Ballroom の他、日本庭園 The Japanese Garden、子供美術館 The Children's Museum、ノースウエスト版画協会 The Northwest Print Council、ウォーターフロント公園 Waterfront Park の各地に及ぶ。

日本風の会は、世界中に支部を持つ国際風協会 The International



Brantley Gallery の様子



ミニ風を作る吉積氏

Kite Association の日本支部で、最も古く、規模は世界第二位である。最大なのはアメリカ支部のドラケン・ファンデーション The Drachen Foundation ドロシヤやヨーロッパ諸国、アジアの国々から群を抜いて三千人の会員を有する。ドラ

ケン・ファンデーションは、シアトルの本部から事務局員を数名、今回のイベントを補佐するため派遣してきていた。会長スコット・スキナー Scott Skinner 氏は、週末の日本庭園で「浮世絵における風」について講演を行った。氏は風が描かれた浮世絵を収集されているコレクターでもある（5）。浮世絵における風の図様は、景物表現として描かれているにすぎないが、風における浮世絵の影響は計り知れない。両者が特に江戸末期から互いを作品に取り込んでいることを考えると、風絵師と浮世絵師の直接的な影響関係の有無については興味深い論点であるように思われ、この点については稿を改めて報告する。

話をインターンに戻す。ポートランド美術館における風作りワークショップは、明治期の浮世絵が常設展示されているギャラリーの一角で行われた。入場無料（展覧会の入場料は要）で、版画を見に訪れた人々が、自由に立ち寄ることが出来る。

和紙と竹、風系のみを使って迫力ある風が完成されていく様子を、大勢の来館者が見学しに訪れた。ドラケン・ファンデーションから来た事務局員や報告者が通訳となり、自由に質問が出来る為、二時間のデモンストレーションの間に訪れた客数は一日につき凡そ百名に上った。期間中、地元の新聞メトロ・ポートラン

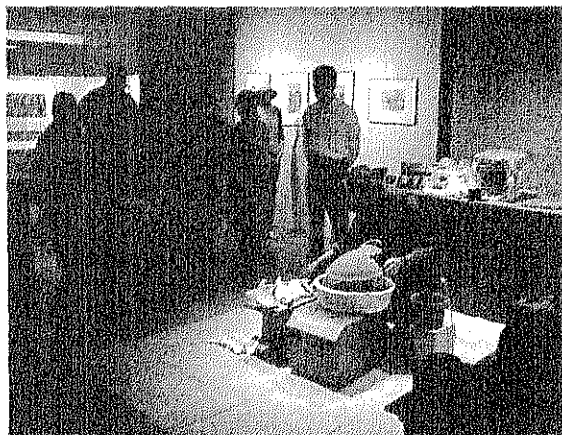
d The Metro Portland は一面このイベントを紹介した。最も多い質問は、風の素材についてであった。自分でも作れるのかどうかという趣旨であったが、本の和紙と竹が入手しにくい為、吉積氏は包装紙にストローを使って制作する方法を実演し、好評を博した。数名の中学生からは、教科書で日本の風について学び、興味を持って来たという声も聞かれた。また、日本人学校に通う在米日本人や、合気道教室 (The Portland Aikikai) の指導者が生徒を連れて訪れている光景も見られた。

一方で、ダンスホールでは事前に予約した子供達が美術館の教育担当学芸員の指導で、ミニ風や大風を制作していた。そして、週末には三つのプログラムが合同して、日本の職人はデモンストレーションで制作した奴風（やつこだこ）を、ドラケン・ファンデーションは持参したスポーツ・カイトを、子供たちは大風などを川沿いの公園に運び、それぞれの手によって色・形ともに様々な風が大空に上げられることになる。一連のイベントのハイライトであるこのウオーターフロント公園での風揚げ大会には企業協賛が付き、記念の टीーシャツ も作られた。テレビ局、新聞各紙の取材もあり、会場は終日風を楽しむ人で賑わった。

信楽焼き制作

七月二三日からの一週間は、日本から信楽焼きの重要無形文化財保持者（人間国宝）大谷司郎氏が来て、美術館内プラントレー・ギャラリーで、陶芸制作の実演を行った。土は地元の陶芸家が用意し、制作された作品の一部は実際に窯で焼き上げられて、参加者に引き取られた。

土練りは同行された大谷氏のお嬢さんが担当され、大谷氏は集まった人の前で電動ろくろを使った成型（土から茶碗などを形作る）、手捻り（手動の回転台を使った成型）、から高台を削りだす工程までを、それぞれ一日ずつ分けて行った。大谷氏の代表作品が脇に特別に設えられて、鑑賞者は完成品と見比べることが出来



信楽焼き制作。中央が大谷氏。

物館フリーア・ギャラリー学芸員のルイズ・ポート Louise Allison Cort 博士が大谷氏と共に信楽村と信楽焼きの伝統について講演を行った。豊富なスライドで信楽村を紹介し、日本では一般的な信楽の狸の置物や、マンホールに描かれた陶芸作品などは現地の人々の笑いを誘った。

ところで、脇に陳列されていた大谷氏の作品は、デモンストレーションの中日を境に、「個人寄贈」のキャプションが付けられる様になった。それは、美術館を訪れたある個人が、大谷氏の作品を見て感激し、その場で購入を申し出て美術館に寄贈したものだという。良い作品を多くの人と共有できるようにと、購入してすぐ寄贈した。こうした個人からの申し出は、美術館の予算を割くこと無くコレクションを充実させることが出来るため、美術館側としては願っても無いことである。日本の美術館では書類上の様々な手続きに長い時間がかかり、その場

で作品を購入して翌日からキャプションを変更して展示するということはほぼ不可能であり、報告者は今回、こうした受け入れ態勢の充実度がアメリカの美術館の発展してきた大きな理由であるように思った。

ボランティア・スタッフと高齢者対策

美術館は完全なバリアフリー（車椅子利用者がスムーズに移動できるように、通路や出入口に段差を無くし、階段に代わってエレベーターや昇降機を備えた施設のこと）である。オレゴン州は一九九〇年代に州法で公共施設の全面バリアフリー化を義務付け、市役所や美術館は隔々まで配慮されているほか、大きな駐車場には必ず車椅子車優先の場所が確保されている。美術館を訪れるハンディキャップを持つ人は驚くほど多く、先天的な障害で歩行が困難な若者から、高齢のため車椅子を利用している人まで、生き生きと一人で館内を往来している。また車椅子の人の鑑賞を補助するための専門ボランティアが常駐しており、求めに応じて対応に当たる。こうした施設には殆どスロープを見かけず、皆がエレベーターと昇降機、また近くのガードマンに支えられて段を昇降していた。日本の公共建築にもバリアフリーは整いつつあるが、アメリカの徹底した利用者本位の態勢は見習うべき所が多い。アメリカには現ブッシュ政権を支持する最大の政治勢力として、退役軍人会が存在する。ベトナム戦争から帰還した傷病兵に対する保護を訴えたこうした団体の声が反映してか、高齢者対策は法律面で非常に進んでいるといえよう。報告者は現地で生活していて、車椅子利用者の数の多さに驚いたが、これは、実際にハンディを持つ人が世の中にいかに多いかということを知らずにただけであったと思う。日本でも一人で外出できる設備が充実していれば、会う機会が格段に増えるであろう。ハンディを持って生まれてくる人は実際には非常に多いのである。

ポートランド美術館には非常勤のボランティア・スタッフが約六〇〇名登録さ

れている。リタイアした高齢者が主体となって、オーディオ・ガイドの貸し出しや受付に当たる。今会の日本美術展 Splendors of Imperial Japan の開催期間中は、全員に「ハッピー・ハッピー」(Happy)と半被を掛けたネーミング。漢字で胸に「福寿」と書かれた半被で、赤色と青色がある。」と名付けられた半被が制服として貸与され、非常に楽しそうなボランティア活動を目にした。ハッピー・ハッピーはミュージアム・ショップで販売されている。ショップには他に日本語が書かれた提灯や扇子、茶器、家具などが販売されていた。

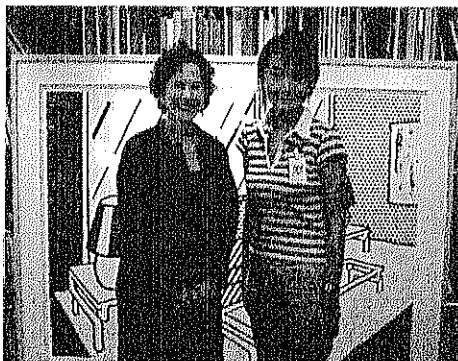
更に、アメリカの美術館と日本の美術館が大きく異なる点に、ガードマンの数が挙げられる。トランシーバーで四六時中連絡を取り合っており館内を巡回するガードマンが、一つの展示室に二人は居る。これは、アメリカの美術館の展示品が私的な寄付によって大部分が占められていることに起因し、美術館側は、安心して寄附できる安全性をPRするためにも、多くのガードマンを雇用する。アメリカは日本ほど治安が良くないため、全体的にガードマンの需要は高く、人件費は安く抑えられている。彼らはまた、ポートランド美術館では車椅子利用者の移動補助の役割も果している。

学芸部門の業務

学芸部 Curatorial Department は、六つの専門分野にそれぞれ学芸部長、すなわちキュレーターが居る。そのトップには現代美術部門のキュレーターが居る。彼らは皆、専門分野において複数の著書を持ち、大学の講師陣と同程度の社会的な地位がある。学芸員が多忙を極めるという展では日米は同様で、報告者がアジア部門キュレーターのドナルド・ジェンキンス氏 Donald Jenkins にアポイントが取れたのは四週間後のことであった。業務は資料の調査や展覧会の企画以外に、資金集めのパーティーを主催するホストとなったり、コレクターと寄附に関する交渉を行ったりする。即ち、美術館全体の運営に関わっており、美術館運営と資



明治期錦絵については今後調査を進める



調査員リン・カツモト氏(左)と報告者

金的な問題、企画・コレクションのバランス調整も担当している。実際に作品を調査してカタログをまとめたり、作品の管理をしたりするのは、キュレーターの下で働く調査員 Researcher や収蔵庫の担当者 Keeper である。関連行事の実務は特別企画部 Special Project Department と教育部 Educational Department が行う。ただし、これらの業務の区分は明確ではない。アメリカ社会は終身雇用制ではないため、組織図は重視されていない。報告者がイン턴ンとして受け入れられ、翌日から働くことが出来たのも、学芸部と特別企画部にそれぞれ関わって仕事が出来た態勢があったからであろう。そのため、資金面の問題点や組織の構造、コレクターの情報は、関係者でもごく一部しか知らされていないようだった。

キュレーターと各部の部長には広いオフィスが与えられ、来客には各オフィスが単独で対応に当たれるようになっている。また、美術館内に美術書の図書館があり、調査員はそこに隣接した研究室を持つている。図書館は一般にも開放されているが、貸し出しは美術関係者のみに限られていた。報告者が見た限り、日本美術に関する文献は、日本国内の大学で目にする和書や事典と同程度の物が並

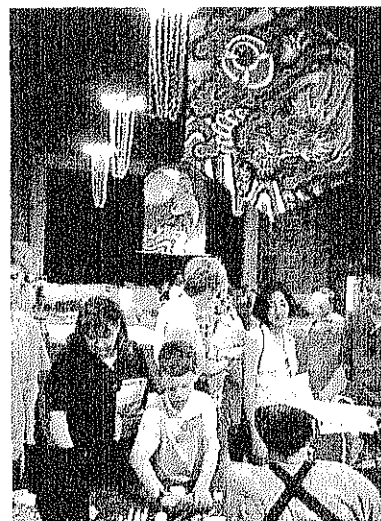
んでいた。

さて、インターンの後半は殆どの時間を版画を収蔵するギルキー・センター Gilkey Center でリン・ジエロフセン・カントモト氏 Lynn Jacobson Katsumoto と過ごした。カタログとして出版を予定している七五〇枚の浮世絵の内、鈴木春信を重点的に調査し、続けて国貞とその弟子に当たる明治期の浮世絵師の作品を扱った。調査方法は、調査員が作品から読み取れる台帳に情報を書きつけて、不明な点を本や辞書で調べるといふ、日本と同様のものである。しかし、日本語が堪能な専門の調査員でも春信の版画に書かれた古文を解読することは困難であり、図像の意味解釈や日本美術の調査方法も伝わっていないため、日本から来た報告者を、美術館の人々は非常に暖かく歓迎してくれた。古文の解読は日本人でも困難であるが、少なくとも全世界に愛好家を持つ浮世絵や、様々に引用されている古典文学については、海外の研究者が利用しやすい辞書が望まれる。

ギルキー・センターは、版画を調べたいと希望する一般の学習者にも閲覧が認められている。その担当者としてジェーシー・スキレクター JO Schleiter 氏とパメラ・モリス氏 Pamela Morris が常駐しており、報告者はインターンの最終日に、お二方の厚意で、収蔵庫を見学させていただいた。版画とデッサン、ポスター、写真など、約二〇〇〇点が収められた収蔵庫は地下室にあり、二四時間空調が管理されている。地震の対策は殆どされていない点が日本と大きく異なる所である。浮世絵の配置は絵師の名前の五十音順で、これはコレクターが寄贈した際に既に完成されていた方法をそのまま踏襲している。他のカテゴリーについては年代順が考慮されているとのであるが、浮世絵は、国貞の弟子が「国」「貞」の字を用いたように、絵師の名前が系図に準拠して付いている場合が多いので、変更していないとのことである。ミレニアム・プロジェクトで収蔵庫は拡張されたが、今後、増え続ける寄贈作品に対応できるよう、更に広いスペースを検討中だといふ。

三、美術館の地域戦略

日米の美術館の印象を大きく分けている要因の一つに、しばしばアメリカの美術館の活気ある様子が取り上げられる。アメリカの美術館は教育普及のプログラムが充実していたり、付属施設が整



ファミリー・プログラムの様子

っていたりするため、教育施設としての機能に加えて、子供を対象としたエンターテインメント性が豊かであることは、日本の美術館が学ぶべき点として指摘されるところである。これまで、先行研究の成果から日米の美術館の根本的な差異は、アメリカでは寄附税制の優遇措置があるため成功者が富を還元する場として美術館が機能し、美術館の運営資金はほとんど個人の寄付によって賄われている点であることが明らかになっている。しかし、美術館についての論議は、各国の美術館と日本の美術館を比較検討し、違いを明らかにすることに重きを置いてきた。報告者は、こうした日本の美術館研究の現状を踏まえ、今後日本の美術館をより良くしていく為の事例研究として、ポートランド美術館の地域戦略に着目した。

アメリカ北西部で最も古くから活動してきたポートランド美術館の歴史は、そのまま現地の美術館の発展経緯と捉えることができる。美術館は創設者から寄せられた寄贈品を基盤に作品を充実させていっているが、収集方針として、美術史上の価値だけでなく、土地の歴史に配慮した作品、特にアメリカン・インディアンの作品を紹介している。美術館があるオレゴン州は独立十三州の一つで、近隣

には開拓にまつわる伝記やアメリカン・インディアンと呼ばれる原住民との争いと協調の遺跡が多く残されている。合衆国の大都市の中でも特に白人種が多いポートランド市は、白人が入植する以前から存在した歴史を忘却させないよう、原住民の美術が特筆して紹介されているのである。また、この地域はコロンビア、ウィラメット両河川に挟まれて古くから軍港を擁したため、交通の要所として様々な移民を受け入れてきた。今回行われていた日本美術の展覧会も、単なる個人コレクションの巡回展というだけでなく、ポートランド市に早い時期から移り住んで定着した在米日本人団体へ配慮した展覧会という側面を持っている。

"Splendors of Imperial Japan: Arts of the Meiji Period from Khalili Collection" 展は、平成十四年六月一日から同年九月二二日まで開催された。ハリリ日本美術コレクションを中心とした三五〇点の明治期日本美術品が出品され、会期中は夏期休暇中だったこともあり多くの家族連れを動員した。これに先立ち五月二日からは特別行事"Japan Summerfest 2002"が美術館を中心に開催された。近隣の企業、店舗、公共団体の協力を得て百種に及ぶ日本文化を紹介する行事が美術館内外で行われ、更に近隣の画廊は日本美術作品を展示し、レストランは日本食の特別メニューを用意するなど、当該時期のポートランド市はまさに日本文化一色であった。

こうした取組みは、特に地域コミュニティと美術館を連携させる長期的なプランの一環で行われている。ポートランド市は戦前から日本からの移民が多く、"Japan Summerfest 2002"は、近年急速にアメリカ社会に浸透した、漫画やアニメーションといった日本のポップ・カルチャーや、鮭バー、豆腐といった和風の健康食品など、日本文化に対する関心の高まりのあおりを受けて、美術館が立地する地域社会における在米日本人組織との関係を強化することを目的の一つとしている。米国の美術館は基本的に個人からの寄付金によって運営されているため、美術館が長期的な予算を確保するためには、寄付金を投じたいと思わせる

企画を用意し、積極的に宣伝する必要があるからである。以前には、イタリアを対象としたサマーフェストも行われていた。

展覧会は明治期の日本美術作品のうち、日本から海外に輸出された工芸作品を収集した、英国の医師ハリリ氏のコレクションが中心となっている。万国博覧会や内国勲業博覧会に出品された後に再び海外に輸出された物、また、皇室の紋章入りで外交に用いられた物もある。これらの壺、七宝、家具調度、置物などの工芸品は多くが非常に装飾的で、精緻な細工が施された、現在の私達が想像する明治美術とはかけ離れた様相を呈す。展覧会名は、ハリリ・コレクションが展示の大部分を占めるにも拘らず敢えてコレクション展とは銘打たず、"Splendors of Imperial Japan" (日本帝国の輝き) を表題として、日本文化を紹介する展覧会であることを全面に打ち出したものとなった。

こうした地域戦略は、第一に米国の美術館が設立の早い時期から教育普及をその目的としていることによるものである。第二に、運営資金の調達とも関係している。第一の目的に照らせば、アメリカは土地の歴史を共有していない他民族社会であるため、美術館は作品を介して歴史を教育する場として機能している。日本の美術館では、学校教育で日本民族の歴史を共有するため、同じ教室で机を並べる生徒が違う民族の歴史を辿ってきていることを美術館で体験する必要がある。日米の美術館運営が、教育普及や広報などの点で、鑑賞者に与える印象を大きく分けているのは、歴史的背景や民族構成といった前提の差異でもある。

第二の目的に照らせば、美術館の地域戦略は、寄附を募って運営の資金を確保するためのものでもある。企画や収集の方針は、当然それを意識したものとなる。ポートランド美術館でもかつて、現在の日本の美術館が抱えているような予算不足の問題が生じ、市民参加や展示内容の点で大きな改革を行った結果、現在の開かれた美術館運営がなされるようになった。そうしてポートランド美術館では、この国の美術館の中でも異例の、特別企画部長 Special Project Director というポ

ストを設けるようになり、大規模な地域と連動した企画を行う際には、その地域の専門家を雇用してゲストを現地から招聘するのである(6)。資金の獲得を目的とした地域戦略の第一歩として、サービスク拡大のための人的資源を確保することは、日本の今後の態勢としても学ぶべき点であるように思われる。

九〇年代後半から日本では芸術文化に対する政策の遅れ、特に施設を活用する人や物の不足を指摘されるようになった。それに対しこれまでに幾つかの税制改革が行われている。文部科学省は平成十三年に文化芸術振興基本法を制定し、以下のことを定めた。

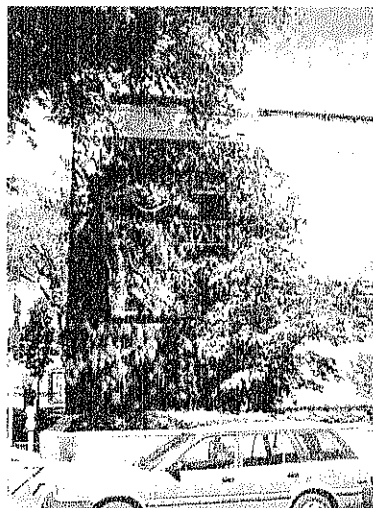
「我が国の文化芸術の振興を図るためには、文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨としつつ、文化芸術を国民に身近なものとし、それを尊重し大切にするよう包括的に施策を推進していくことが不可欠である」(文化芸術振興基本法、前文)

芸術という言葉が法律上に明記されたことは大きな前進である。また平成十四年度税制改正(文化芸術関係)で、文化芸術活動等に対する寄付についての税制措置について、国立美術館への寄附は個人の場合、「寄付金額(当該年度の所得金額の百分の二五を限度)・一万円」が所得控除となることが決定した。こうした動きは、まだまだ改善の余地はあるにせよ、日本の美術館が徐々に施設を充足させる時代からその活用方法を模索する段階へと、変化しだしていることの表れである(7)。更に二〇一一年、美術館をテーマとした展覧会が各地で開催されているが、展覧会の準備期間を考えると、それぞれの美術館内で少なくとも二年前から、美術館の問題点を意識した活動が行われてきたことが伺われる。現在は、税制が緩やかに変革し、それに先立ち問題点を意識する人材が生まれている状況である。日本の美術館の運営方法は、古くから海外の先進事例を学ぶことで展開してきた。資金面で困難に直面したポートランド美術館が、教育普及を充実させて起死回生したことから学ぶならば、これからは美術館がサービスク拡大を目的とし

た新たな人的資源確保に予算を配分し、ボランティアや民間企業からの人材を活用できる受け皿を、美術館内に設ける時期に差しかっているのではないだろうか。

【附記】 インターン期間中、ポートランド美術館の Ms.

Diane Durston, Mr. Donald Jenkins, Ms. Lynn Jacobson Katsumoto を始め、多くの方に「教示を頂きました。厚くお礼申し上げます。」



展覧会のフラッグ

註

- (1) ポートランド美術館のインターンシップは通例行われているものではなく、報告者は筑波大学大学院で明治期の錦絵を専攻していた関係で、明治時代の日本美術を紹介する展覧会が開催されていた館に申し出た所、インターン生として例外的に受け入れられる運びとなった。受入先はポートランド美術館学芸部 Japan Summerfest 2002 実行委員会事務局である。
- (2) Portland Art Museum Selected Works, Victoria Elison and Robert Peirce ed., Portland Art Museum, 1996
- (3) ポートランド美術館所在地は 1219 SW Park Avenue Portland, Oregon 97205, U.S.A. The Pacific Northwest College of Art, Northwest Film Center が隣接する。
- (4) Portland Art Museum Project for the Millennium, Margaret Bullock and Donald Jenkins ed., Portland Art Museum, 2000
- (5) 浮世絵と屏の関係について、屏絵師である土岐・吉積両氏、スキナー氏から多くの貴重な情報を頂いた。感謝申し上げます。
- (6) Japan Summerfest の頃の特別企画部長は Diane Durston 氏で、長く日本に生活し、日本文化の著書を多く出版している研究者である。

(7) 参議院選挙とほぼ同時期に公明・共産党の強力な後ろ盾のもとにスピード可決された文化芸術振興基本法には罰則規定が盛り込まれておらず、その命令は実質的に大きな効力を持たないという問題点は残った。